

外来で目をまわさない めまい診療シンプルアプローチ

城倉 健●著

横浜市立大学大学院主任教授・神経内科学・脳卒中医学 田中章景

神経症候学は、19世紀の神経学者ジャン-マルタン・シャルコー (Jean-Martin Charcot) らが活躍した時代に、神経症候を神経病理所見と対比することで症候に特異的な責任病巣を明らかにするという手法により確立した。この当時の知見は現代に至るまで脈々と受け継がれてきている。そして、現代においても神経症候学が色あせないのは、神経学の分野では、患者を問診し診察で神経症候を明らかにするというスタイルが、最先端の診断機器と比較しても遜色ないほど多くの情報をもたらすことに起因している。

しかし、一方でMRIをはじめとする診断機器は客観的かつ正確に責任病巣を描出しうるし、遺伝子検査により100%確実な診断を下せる病気もある。このように患者から情報を得るツールが増え、その精度が飛躍的に向上するにつれ、古典的な神経症候学の相対的地位は低下しているといわざるをえない。

本書『めまい診療シンプルアプローチ』の著者である城倉健氏は、

神経症候学を自らの専門分野の1つに挙げるほど、神経症候学に対する強い情熱を持っている。特に眼振をはじめとする眼球運動と生理機能・画像検査所見を対比する数多くの研究を通じ、めまいを主訴とする患者を神経症候の把握によつて的確に診断する能力において群を抜いている。

本書は、そのような著者が、これまでのめまい診療・研究を通じて生み出してきた知見、技術のエッセンスを見事に集約した一冊となっている。めまい診療は、文字通りの「目がまわる」だけでなく、「ふわふわする」「ふらつく」など患者の多種多様な訴えからスタートする。めまいの診断には、眼球運動を中心に全身の神経症候を正確に把握することが最も重要であり、神経疾患の中では先進的診断技術の有用性が相対的に低いといえよう。本書には、独自のフローチャートをはじめ、わかりやすいイラスト、さらには眼振の動画などが掲載されており、初学者や神経学を専門としない医師にも神経



症候の診かたからその意義づけまでが容易に理解できる構成となっている。

本書を通じて著者が読者に訴えたいことは、めまいに関連する神経症候を正確に診る技術を修得し、その診療効果を実感することで、神経症候学の面白さ、重要性を再発見してもらいたいということであろう。さまざまな先進的診断機器が利用できるようになった現代は、神経症候の意義づけが19世紀に比べればはるかに正確にできるようになっている。この点で、現代こそ、新たな視点で神経症候学を見直すことで、問診と診察だけで、責任病巣を予想し的確な診断を下しやすい時代になっているのではないかと思われる。本書がそのような神経症候学リビジットのきっかけとなれば著者にとってもこの上ない喜びであろう。

B5 頁152 2013年
定価：本体4,500円＋税
[ISBN978-4-260-01833-3]

医学書院刊